

# クモヘリカメムシの発生の特徴と耕種的対策

山下 賢一 (兵庫県立農林水産技術総合センター)

クモヘリカメムシはイネ科植物を餌として兵庫県南部では年間2～3世代発生する。恒常的に発生する地域はイネ科雑草繁茂状況と大きく関係しており、斑点米発生被害を軽減するためには、非農耕地も含めた地域全体でイネ科雑草を効率的かつ効果的に管理する必要がある。本講演ではクモヘリカメムシの現地における発生の特徴を挙げ、季節ごとに発生抑制的に働く耕種的対策を提案する。

## 1 越冬明けから第1世代発生まで

成虫で越冬したクモヘリカメムシは越冬明け日平均気温が10℃になる頃に産卵準備に入る(山下ら2005)。産卵場所はイタリアンライグラスなどのイネ科雑草繁茂地が多く、ふ化した第1世代幼虫は、そのまま留まるため、この時期に牧草として刈り取れば第1世代成虫の生息密度を低減できる。

## 2 水稻への飛来時期

水稻へのクモヘリカメムシの飛来時期は、普通、稲の出穂後である。栽培でイネ科雑草の除草を失敗して、イヌビエなどの雑草が繁茂すると、出穂の早いそれら雑草にクモヘリカメムシを呼び込むことになる。また、畦畔のイネ科雑草は出穂2週間前から穂を付けない管理を徹底して、畦畔をカメムシ増殖の場にしないことも重要である。

## 3 水稻収穫期前からの対策

水稻の収穫期前から斑点米カメムシは水田を絶好の餌場としている。水田で捕虫網によるすくい取りを行い、要防除密度に達した場合は農薬による防除を行う。

## 4 11月から3月の生息場所

クモヘリカメムシの光方向への飛翔行動に着目して、成虫の行動と温度の関係进行调查し、その結果を図に示した。5℃以下では活動は静止状態が続き、15℃では歩行のみ、20℃で飛翔が始まるが、その距離は短く、25℃で通常飛翔が一般化することがわかった(山下未発表、2004)。冬季の越冬場所を特定し、静止している成虫を対象に、生息ほ場の耕耘など、耕種的対策により越冬密度を減らすことが重要である。

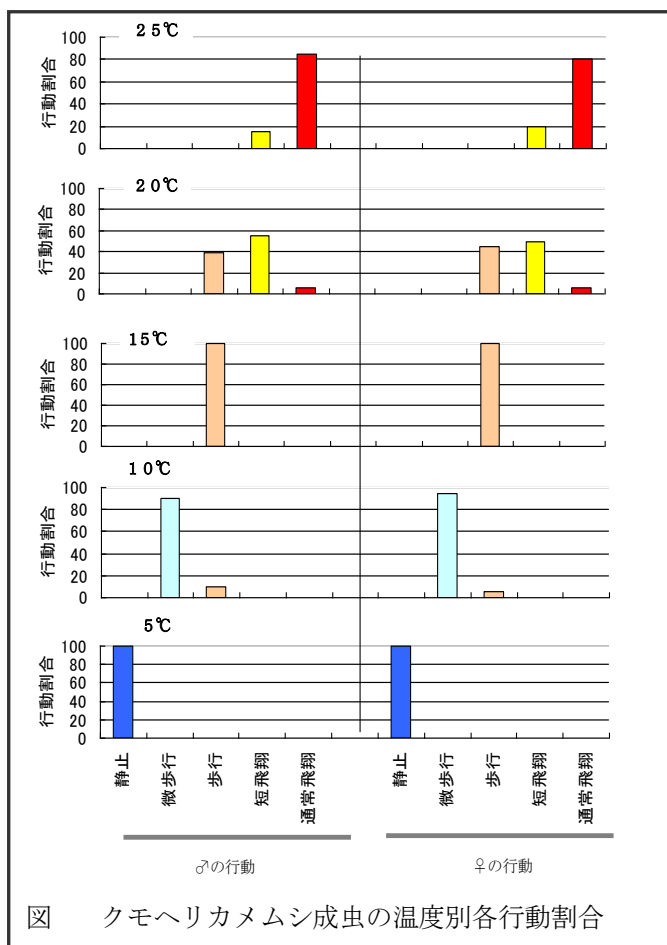


図 クモヘリカメムシ成虫の温度別各行動割合